

講評

日本語学術共通語彙データベースを利用した語彙教材の開発

——大学での学習を支える語彙の習得のために——

本研究は、大学レベルの留学生に対して、日本語の学術場面での語彙の教育を進めるためのアプリの教材開発である。「書き言葉均衡コーパス」を利用し、一般テキストに対する学術テキストでの頻度などを勘案した「学術共通語彙」を1159語選定し、語釈等を作成している。アプリとしての試用版は415語のもので、チェック、語釈、練習などのステップを含む。その制作にあたって、単語学習の方法などの予備調査を行うとともに、検証調査もしている（テスト結果では向上）。しかし、残念なことにアプリ教材の公開は報告の時点では行われていない。語釈の方がターゲットの語彙よりも難しくなるなどの課題があったとのことである。語釈は重要な課題と言える。学術用語である以上、それぞれの母国語に対応させた方法の開発も必要であろう。漢字、外来語など語種に対応した指導法も課題である。調査対象が少ないことも気になる点である。今後、課題を解決し、効果的な教材を公開されることを期待したい。

(早稲田大学文学学術院 教授 森山 卓郎)

ビジネス場面における問題発見解決力育成のための日本語コンテンツ開発と教育実践

本研究の主な目的は、実際のビジネス場面で起きた文化摩擦をもとに開発された「ケース（事例）教材」を、通常の教室授業およびオンライン授業で使用し、その有効性を検証することであるが、その目的を達成するにはさらなるデータの分析が必要だと思われる。

報告書に掲載された授業の発話文字化資料から参加者が討議を通じて互いに学びを深めている様子をうかがうことができたが、この実験的な授業が全体として何回、何時間行われたのか、何時間の発話資料をどのように分析したのかなどをより詳しく知りたい。また、4回のオンライン授業については日本語の表現や語彙の理解促進に効果があったと報告されているが、その結論の裏付けとなる事実を、授業の発話資料やワークシートの記入内容などをもとに明示するとよかった。

ビジネス日本語の教育は今後ますます重要になると考えられるので、「ケース教材」を用いた授業や遠隔授業の進め方などについてより精緻な実践報告を期待したい。

(名古屋外国語大学外国語学部日本語学科 教授 尾崎 明人)

「書写学習」と連携した漢字の理解・運用能力の育成

本報告は、デジタル化の加速により書字機会が減少する現代の状況と、学習現場における「文字指導」の形骸的なあり方とをかえりみることを土台に、学力に資する実効的な書写学習のあり方を明示した力作である。本報告の中核事項となる「思考する書写」は、経験則に基づく教師中心の指導結果に過ぎなかった「書写」の学習を、子どもたち自らが原理原則を発見し主体的に学習していく「過程」に引き上げている。自ら発見し、言語化して交流するこの過程は、書字に対する「メタ認知」の活動であり、文字を高次から理解することである。

さらに本報告が素晴らしいのは、実験群と統制群との対照を通して仮説の効果を実証したことである。調査開始直後には表れにくかった効果も回を重ねるごとに有意な結果を呈していく。

継続的な調査を通して、仮説のみならず、継続的に「書く」ことの有効性も明確になったと言える。イベントや保護者アンケートなど、様々な角度から研究されており有益な内容であった。

(奈良教育大学国語教育講座 教授 棚橋 尚子)

小学校教員に必要な文字指導力育成への試み

—硬筆手本作成活動を通して—

保護者を除き、子どもの書字に直接関与できるのは小学校教員である。そして、その責任は重い。執筆教科書が日本語に翻訳されているフィンランド国語教育第一人者のメルビ・バレ氏は、「字は教師なり」と言われた。子どもたちがどのような字を書いているかを見れば、教師の指導がわかるというのである。本報告は、教師の「卵」ともいべき教員養成系大学の学生たちが、硬筆手本を作成していく中で、自らの書字に対する意識や、書写指導の必要性への意識を高めていく過程を明らかにしたものである。実践は教育学部での書写分野の時間を通して行われ、学生たちの書写経験の有無や、書写に対する意識などいわゆる「レディネス」を踏まえながら展開されていった。

本報告の価値は、硬筆手本の作成という活動もさることながら、書写が単なる「書字の活動」ではなく、教科理解促進の観点で重要な活動となり得ることを学生が認識していく「意識の改革」を導いた点である。

(奈良教育大学国語教育講座 教授 棚橋 尚子)

日本語学習入門期における非漢字圏の外国人のための新しい漢字導入法の効果の検証研究

本研究は漢字学習を二段階に分けることを提案している。第一段階では学習者の母語を使用し、ストーリーを利用して漢字の「字形」と「意味」だけを記憶させ、短期間に多くの基礎漢字を導入する。第二段階で漢字の「読み・書き」と「漢字語彙」を教えるという指導法である。

この新指導法の有効性を検証するために、成人および年少者を対象として4種類の異なる実験コースを設けて漢字指導を行ったことは評価に値する。授業後の確認テストと遅延テストの結果および授業アンケートに対する学習者の回答から考えると、「母語を用いて、字形と意味だけを覚えさせる」という漢字導入の方法は学習者の負担を軽減し、漢字学習への興味を喚起するという点でかなり有効であると思われる。

しかし、今回の実験授業は第一段階の漢字教育に限定されている。第一段階で得た知識を第二段階の「読み・書き」教育にどのように生かすかは明らかにされていない。新指導法の有効性を実証するにはさらなる研究が求められるだろう。

(名古屋外国語大学外国語学部日本語学科 教授 尾崎 明人)

中国人日本語学習者に対する漢字字形指導のための実態調査

—学習者の理解度と漢字の使用実態に即したシラバス構築を目指して—

同じ漢字文化圏である大陸の中国語母語話者の字形指導についての基礎的研究は必ずしも進んでいなかった。しかし、簡体字には、「广」と「広」など、一般的な日本人にわかりにくいもの、「边」と「辺」など小さいながら違いがあるものなどがあり、字形指導には課題がある。

本研究では、中国語母語話者の習得状況、授業で学ぶ必要性、習得しにくい字、日本人の理解度、許容度（違和感などの印象）、企業などでの意識、そして、手書きの場面の有無、など、

多様な観点から包括的に字形指導とその背景について実証的な調査がなされている。その結果、授業で学ぶ必要を感じる学習者の多さ、簡体字への違和感を感じる日本人の多さ等、重要な結果が明らかになっている。字形指導の必要性とシラバス作成の重要な資料と言える。例えば「無作為に選んだ日本人 133 人」がどの程度客観性を担保できるかなど量的質的課題は多少見られるものの、全体的に極めて大きな意義が認められ、今後の研究も期待される。

(早稲田大学文学学術院 教授 森山 卓郎)

選考委員

尾崎 明人 名古屋外国語大学外国語学部日本語学科 教授

棚橋 尚子 奈良教育大学国語教育講座 教授

森山 卓郎 早稲田大学文学学術院 教授

佐竹 秀雄 公益財団法人 日本漢字能力検定協会 現代語研究室 室長